



●デザイナーの仕事 Henri Gueydan & Fumiko Kaneko

2つの国でデザイン、
僕はすごい体験をしている

昔から街のシンボルだった東京・渋谷の原宿幼稚園が、まったく新しく生まれ変わって話題になっている。手掛けたのは、フランス人建築家のアンリ・ゲイダンさんとプロデューサーの金子文子さん。二人がデザインしてきたユニークなプロジェクトの数々に驚かされた。

photos: Asuka Katajiri



Designer's works

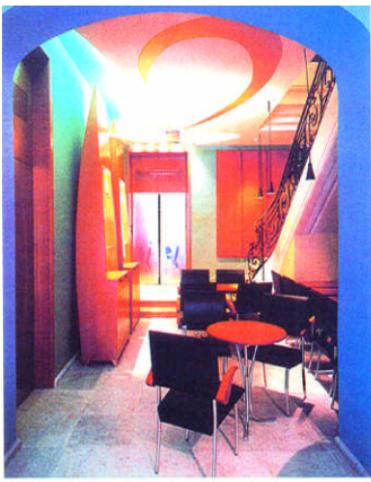


原书幼稚园(综合·读写)

原宿初歩園（東京・渋谷区）

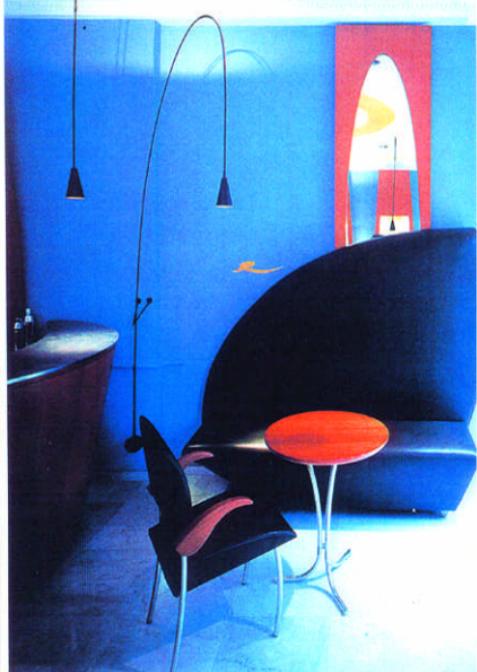
1996年夏に完成した幼稚園の新校舎。老朽化によって旧校舎（厚木上4丁目）を建て直されるとえられたために、設計コンペが実施され、二つのデザイン競争で採用された。ホールを中心とした「メッシュ式」教室、廊道を正面に下り下りできる「アスレチック」、屋外には遊び場や芝生など、屋内・屋外の遊び場が飛び出したり、子供たちが好奇心をもって変遷を楽しめる構造に考案した。ゲイランさんが幼少時に体験した島々の風景や色彩をモチーフに、色彩をテーマにした。東京駅徒歩3分。



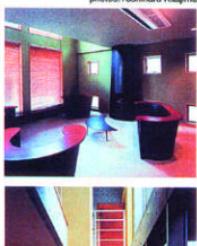


RAGUENEAU (France - Paris)

開業1968年。[クリストフ・ラグヌー]の作。エコモーション・オーバー。ゆかひの、リビングをも兼ねたアーリンドンの内装。1階がダイニング、2階がリビング。廊下はラシードの壁面で、床はスラブでない。空間をコメディの舞台として、家具をその場の人間に例えてデザインした。1997年にリニューアルオープン。202 Rue Saint-Honoré Paris-1^{er}, France ☎33.1.42.61.29.76 営業時間 8:00~19:30, 12:00~15:00(レストラン) ◆日祝



photos:Christo Phe Filoux



photos:Toshiharu Kitajima



ラマール(千葉・川崎市)
施設グランドホテルのラシットン「ラマール」は、海辺のリゾートホテルであることを強調した。中庭と室内のレベルを同じにして、室内も庭園に囲まれたような美しい造りのものに、古くから続くヨーロッパの伝統的リゾートのような、カジュアルでありながら格式高いリゾートホテルへと変わった。1997年にリニューアルオープン。
千葉県川崎市広電820番地川崎プラントホテル ☎0470-92-2111 ◆11:30~14:30, 17:30~20:00 無休

福島邸(東京)

1994年に完成した住宅。都会にあって周囲をビルで囲まれている現状。隣接な部屋の風景ができるだけ見えていたい。そこで、窓を多く設け、外を見ようとした。1階は店主をデザインするクリニックに割かれるため、2階は中庭をデザイン。その中庭を中心とした3階は地下を活用。家の外ではなく、家の内に緑を見せるようにした。作り付けのキャビネットやソファなどの家具は、会員と一緒に考えて設計している。



Designer's Works



「僕のデザインは、この場所だからこの施設だから生まれたというのばかり」と答えた。それなりの目的や機能をもつて自然が生まれるので、何かデザイナーのときにその機能を作らんなどと、カタチでいってはならない。「福島邸」では建築から、ゴミをどうしたるか、ゴミをどういった形で廃棄されるかなどを意識して、家をつくった。都会の中でも自然を感じられる家を提供された。一階は施設を経営するリビング、2階は、2階より上が住まい。ゴミを減らすため、ごみ箱を設けたところを、代わりにごみ箱の真正中で中庭を作った。その周りは向かいが通り、いる間にいるには必ず外に出る現状にある。

バーチの中心にある、17世紀の建物をリニューアルしたサロン・ド・ザ・ダーナ・オーラン・ド・ベニュラックは代表作の一つ、「ジグナード・ベニュラック」の作者エドモンド・ロスター



フランス大使館 経済商務部(東京)

1995年に手がけたフランス大使館のオフィスリニューアル。スチールフレームを組み合わせた、木製の素材を活かした、ハイクオリティで有名なフランスのイメージを演出。反対に自然素材の木製の家具やコノツカーペットと組み合せ、コンクリートをつなげて空間に広がりをもたらした。会議室との仕切りを外すと、広い多目的スペースになる。

「2つは文化的にも違いがある。それは、両国が利害を受け取るのはとても多い。しかし、利害を受け取るのはとても多い」と、僕は、当世の日本のデザイナーより、この体験をしているんだと思います」

フランスと日本の両方で「デザインを続けたい

「僕のデザインは、この場所だからこの施設だから生まれたというのばかり」と答えた。それなりの目的や機能をもつて自然が生まれるので、何かデザイナーのときにその機能を作らんなどと、カタチでいってはならない。「福島邸」では建築から、ゴミをどうしたるか、ゴミをどういった形で廃棄されるかなどを意識して、家をつくった。都会の中でも自然を感じられる家を提供された。一階は施設を経営するリビング、2階は、2階より上が住まい。ゴミを減らすため、ごみ箱を設けたところを、代わりにごみ箱の真正中で中庭を作った。その周りは向かいが通り、いる間にいるには必ず外に出る現状にある。

バーチの中心にある、17世紀の建物をリ

ニューアルしたサロン・ド・ザ・ダーナ・オーラン・ド・ベニュラックは代表作の一つ、「ジグナード・ベニュラック」の作者エドモンド・ロスター

